



しまんとひのきのきほん



森を守り、森を育てる。

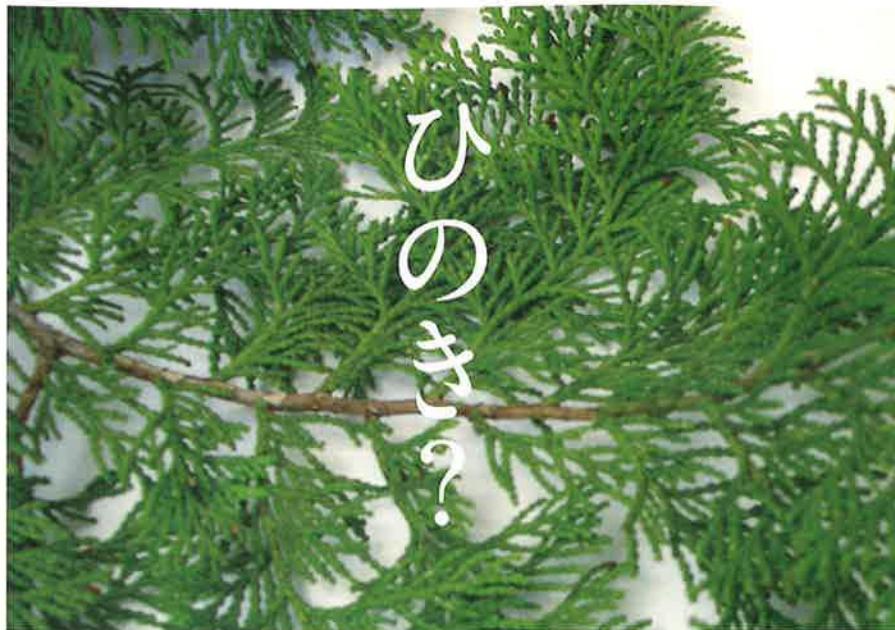
高知県のヒノキは、面積、蓄積とも全国一。特に四万十川流域を含む県西部地域に豊富に存在しています。四万十川流域に位置する四万十市、四万十町、中土佐町、三原村の4市町村では、このヒノキを「四万十ヒノキ」と呼んでいます。4市町村の総面積は 155,326ha です。そのうち森林面積は 134,700ha で、総面積の 87% を占めています。

芳醇香と美桃肌の四万十ヒノキ。

日本文化の象徴たるヒノキ。用途は、生活のあらゆる場面におよびます。ヒノキは豊かな香りとともに、文化の息吹を今に伝えます。高知県四万十川流域は、こうしたヒノキの中でも、特に優良なものを生み出す産地として古くから知られています。ほんのり桃色で、耐水性良し、加工性良し、使い勝手良しと3拍子そろった特徴を備えています。

四万十ヒノキ日本の森をつないでいきます。

日本は木をあつかう文化の国です。現代に生きる我々は、この国に息づいてきた文化を、時代に合う形に進化させ、次世代につないでいくだけの工夫が必要です。その思いを形にするために「四万十ヒノキ」を生産する私たち、四万十市、四万十町、中土佐町、三原村は、ヒノキの新たな未来を拓くための体制を構築しています。



ひのき ヒノキ・檜・桧

ヒノキ科ヒノキ属

Chamaecyparis obtusa

福島県東南以南の本州、四国、九州に分布する針葉樹。大きいものは30mを超えることが知られています。日本書紀には「スギとクスノキは舟に、ヒノキは宮殿に、マキは棺に使いなさい」と書かれています。ヒノキは古くから寺院・神社の建築用として最適で最高の材となることが当時から知られていたのです。

「ひのき」という名の由来は「火の木」の意味で、古来に火おこしに使われたという説と、尊く最高のものを表す「日」をとて「日の木」という説もあります。ヒノキは日本と台湾にのみ分布します。台湾本島には変種タイワンヒノキ(台湾扁柏、*Chamaecyparis obtusa var. formosana*)が分布しています。日本では木曾に樹齢450年のものが生息しているのが最高ですが、台湾では樹齢2,000年のものが生息しています。

ヒノキは、日本では建材として最高品質のものとされ、加工が容易な上に緻密で狂いがなく、日本人好みの強い芳香を長期にわたって発します。正しく使われたヒノキの建築には1,000年を超える寿命を保つものがあります。伐採してから200年間は強くなり、その後1,000年かけて序々に弱くなります。実際にヒノキで建てられた法隆寺や薬師寺は1,300年経った今も維持されています。ヒノキは木材として耐久性も保存性も世界の建材の中でもトップクラスの品質です。



葉裏のY型の白い線(気孔線)
がヒノキの特徴

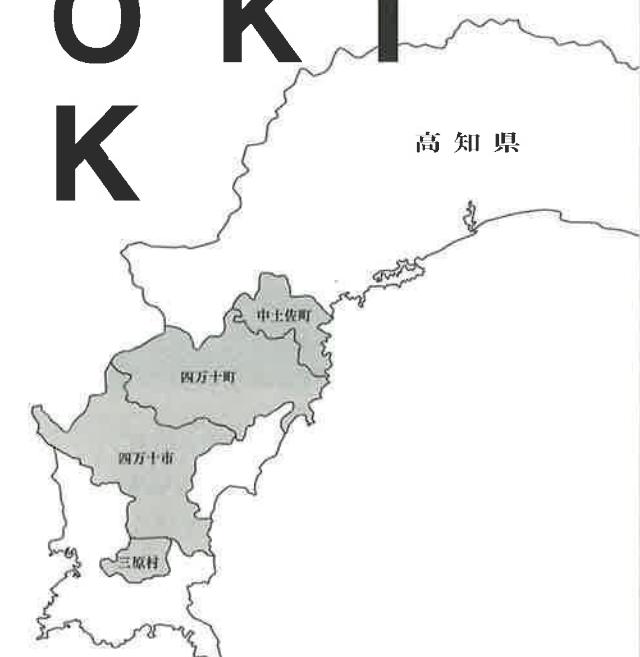


球果はまさに球形で1cmほど
10~11月に熟す

SHIMANTO HINOKI BOOK

しまんと ひのき のきほん

四万十ヒノキは、
四万十川の流れる
高知県西部に位置する4市町村
四万十市・四万十町
中土佐町・三原村で
育てられたヒノキです。
芯が赤く、ツヤがあり
香りが強いのが特徴です。



目次

四万十ヒノキについて p3

四万十ヒノキを植えた人 p5

四万十ヒノキを製材する人 p7

四万十ヒノキで建てる人 p9

四万十ヒノキをデザインする人 p12

四万十ヒノキで家を建てた人 p15

【対談】

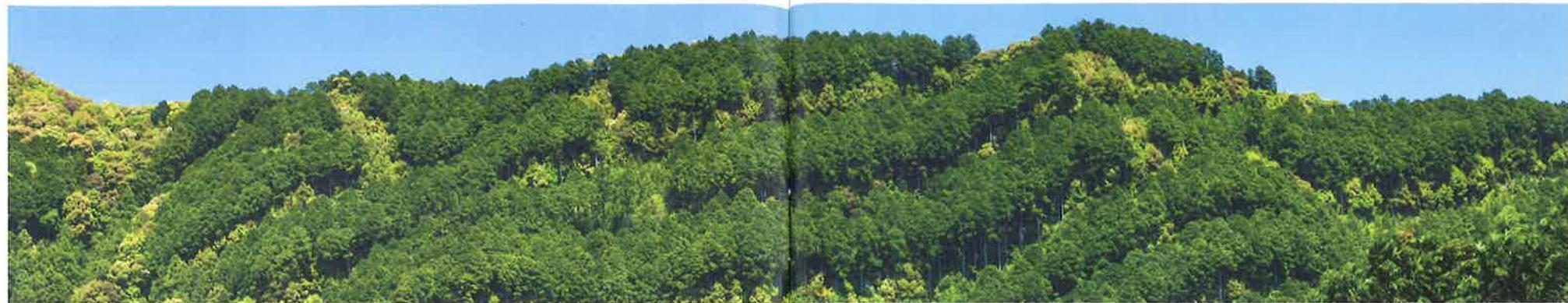
これからの山と
四万十ヒノキが見る夢 p17

四万十ヒノキ資料編 p23

ヒノキといえば四万十を目指して p27

「四十万ヒノキについて」

西土佐村森林組合 中脇 碩哉



「四十万ヒノキ」の元祖は「幡多ヒノキ」「高幡ヒノキ」であり、これらは既に専門業者間で銘柄化されています。

昔ながらに特徴は変わらず木肌は薄紅色、香り良く木質強度も他の追随を許しません。これらの原点を踏まえて木材業界への更なる進出をめざし「四十万ヒノキ」を全国規模となるようにしていくことが必要なのだと思います。

平成、昭和、大正、明治と時を遡り、更に武家の時代にも幡多・高幡地方のヒノキ材が重要視されてきた事は間違いありません。

「四十万ヒノキ」を使用した歴史的背景や生い立ちについては勉強不足であります、私個人の記憶にあるものを少し御披露したいと思います。

私の実家は四十万市西土佐大宮に

あり、かなり古いものですが「一条教房公」の掛軸があります（作者不明）。父（明治44年生まれ）は18歳を超える頃から山師軍団の頭領として国有林（日見須山）を主体に伐出の請負事業を生業にしていたのが大正後期から昭和35年頃までであり、丸鋸による製材所も設置し腹押、向こう取りで大径木を挽くのを見ていたものです。その掛軸は中村（四十万市）から来たという木材商人から謝礼に戴いたと聞きました。私は中学生でした。商人は神社の修復に必要だとして国有林から搬出した樹齢の高い「ヒノキ材」を数本求めたようです。

中村は土佐の小京都と呼ばれその昔「土佐一条家」が莊園（幡多の庄）を総括し近隣農家の中心的采配知行をしていました。中村の海の港

は下田にあり、四十万川を舟母（せんば）に託して流し、パルプ、木炭、建築用材を下田港から紀州（和歌山）へと船で輸送していました。大正初期から昭和40年頃まで港には「紀州製紙」の船場がありました。

「四十万ヒノキ」の元祖である「幡多ヒノキ」もこうして大阪、京都、奈良の神社仏閣の新築や修復工事に使われたと思うのです。推理をすれば果てがありませんが、土佐一条家の時代も頻繁に築城、修理に「幡多ヒノキ」の優れたものを商人を介して京阪、奈良への建造物の資材として送られていたものと推測します。

かつて大阪城の築城の際にも讃岐（香川）から大きな岩石を筏利用で堺港に運んだ例もあるように、四国の自然のなかには昔から人々の注目する自然産品があったことや、さらに

現代にもその成分は大自然の中で引き継がれているものと、誇らしく思います。

ヒノキは特有の防虫、抗菌効果は良く知られていて、フィトンチッドと言う樹木から発散される周囲微生物への殺菌作用物質を含有していること。また独特の香り、艶や色は、その種子を採取した母樹林の影響や育成される森林の土質、風土、気候により30年～50年～100年と成長する中で特徴化したものであります。

安売りはしたくない、やたらと無計画に伐るのはダメ。21世紀の後半にも隆々とそびえるヒノキの山を残そう。

伐るなら植えよう「四十万ヒノキ」。この地にしか無い「四十万ヒノキ」を私たちは育てています。



今、目に見える山の木は全部、私たちの夢であり、大事に育てて来た商品です。

小八木重昭さん 嶺多郡三原村

四万十のヒノキは、以前から「幡多ヒノキ」という名で全国的に知られていました。なかでも三原のヒノキは、きれいな桃色の製品になると評判をよく耳にしたものです。私は「幡多ヒノキ」と言うと三原のヒノキのことだと、自慢に思っておりました。

ヒノキにとって大事なのは山の向きで、きれいな桃色のヒノキは、北受けの山や、日当たりの良い風のあたらないサコ合いで、みられま

した。

三原村は森林率87%で、昔から暮らしは山仕事がほとんどでしたので、この山と生きんことには何んともなりません。

私は昭和16年生れですが、子どもの頃から父母に連れられて炭焼の手伝いをしました。白炭や黒炭、工業炭を生産し、農協へ出荷し京阪神方面へ販売していました。その頃にはすでにスギ・ヒノキの植林はされていました。苗木は宿毛市や中村市で

作付され、2~3年生の苗木を植林していました。植林は1ha当たり3,000本、保育のために下刈、除伐、間伐と長い年月が必要ですね。

私が森林組合に勤め始めたのが昭和40年頃で、だんだんと山の景気も良くなり住宅用の80年生の木材価格は、1m³当たり24万円もした事でした。長さ6mで末口30cm以上になると、末口が1cm増すごとに1m³当たり1万円アップするといわれることもありました。景気の良い頃は、山で仕事をしていても面白かったですね。植林をしちょいたら、将来、勤め人の退職金ぐらいにはなるだろうと山に貯金をするような気持ちで、それを合い言葉に植林をした林家もいたぐらいです。しかし、時代の流れには勝てず木材価格は下落してきました。

大切に育ててきた植林木は、すでに商品となった山、まもなく商品となる山、夢が手の届くところまでできている今、このまま放置すれば山は崩壊し、水資源は枯渇し、水田も人

も生きられなくなる、そんな気がしてなりません。ここ一番、間伐事業だけは最後までやりとげ、この大資源の木材を木造住宅の部材だけでなく、さまざまなエネルギー源としても活用できたらと思います。今までみてきた夢をまさゆめしたいですね。そして、山を守り四万十ヒノキを全国で利用してもらったら最高ですね。



当時の山で働く人々





四万十ヒノキの品質の良さは間違いない。
これからは原木の産地から高品質の産地へ。

上村 賢介さん 上村製材所

昭和2年に私の祖父がこの地にいました。当時は木材運搬と購買の仲買をやっていましたが近くに営林署や木材供給の拠点があったので昭和21年に製材所をはじめることになり私で三代目になります。

そのころの西土佐は優良材がたくさん出ていて、丸ごと一軒分のヒノキや注文に応じた材を全国各地に出荷していました。

現在は住宅はもちろんですが、非住

宅つまり公共の建物、保育所や図書館など低層の建物の材料として使用されるケースが多くなってきました。

木材をふんだんに使った木造住宅に住みたいという潜在的な需要は確実にあると感じるので、国産材は高いのではないかというイメージが一般的にはある中で、さらにその国産材を住宅へうまく活用していくには、その快適な居住性や建築デザインを木造でどう表現できるにかかってくると思います。

四万十ヒノキは色艶もよく素材のよ

さは各方面から評価は高いのですが、その価値を活かせないまま時流に対応してこなかった間に、高品質化を目指した他地域の製材製品が活躍するようになりました。

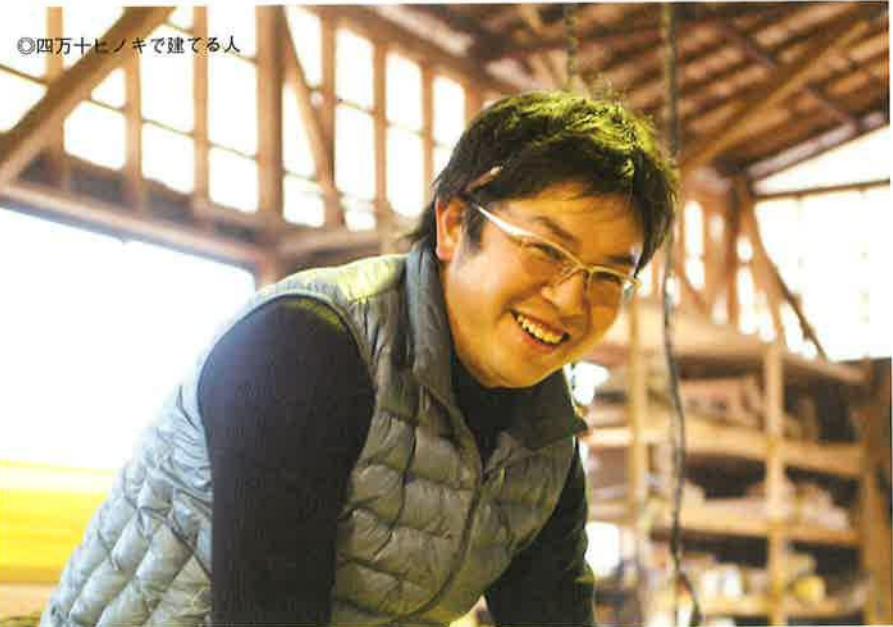
高品質とは①よく乾いている②狂い歪みが出ない③強度があるの3点です。その木材の性質を機器で計測し、一つひとつの製品に性能を印字することで可視化し、またそのトレーサビリティも管理するなど徹底した差別化を図っていくことが四万十ヒノキの利用拡大につながります。

四国の西南部という地理的ハンディはありますが、これからは原木の産地

でありながら、高品質な製品の产地としても認識されるような取り組みが必要になると思います。

自社では昨年より四万十ヒノキの質の良さと管理された無節の板をプランディングして愛媛や香川、名古屋、石川などに出荷しています。こうして祖父が植えてくれたがヒノキが私の世代で商売になっている。100年を見越して次の世代に産業を残していくような企業に携わっている責任を日々感じながら新しいチャレンジを構想しています。





◎四万十ヒノキで建てる人
地元の木の家は
地元のヒノキを使って建てる。

村上 直樹さん（有機的建築）四万十市西土佐

四万十市の中田智子さんは、家を建てるなら「地元の材を使って、できるだけ無添加の家を建てたい」と思っていた。そこで知人から紹介されたのが、四万十市西土佐の大工



村上直樹さん。その名刺には「有機的建築」と書かれている。

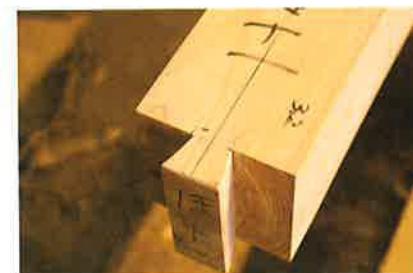
村上さんは、木と漆喰しか使わない家づくりが基本。地元に生きる大工として、木の家は地元産材を使って建てるのが身だ。しかも補強金物やボルトなどは一切使わず、昔ながらの伝統技術を生かし、継手、仕口など、木と木の組み手で留めていく。メインで用いる材は四万十ヒノキ。柱は6寸角にこだわる。

「家を支える梁や通し柱は4寸角で



は細いと思うので6寸角を使います。金具を使わないのも、うちの親方がそういうやり方でずっと通して来た人だから。ぼくもボルトで締めるやり方を勉強していません。木は木で締める。その伝統的な工法で、「ただ、家のデザインを変えただけ」と、いう。

大工の道に入ったのは20歳の時。父である親方のもとに弟子入りし、



28歳で独立。設計も独学で学んだ。「父らが建てているのは昔ながらの日本建築の家で、だんだん仕事も減って来た。ぼくは父に教わったその在来工法を生かして、今どきの家を建てたかった。でも父は“こんな家は家じゃない”と言う。そこで別の会社として独立したわけです。といっても工場は父に借りてですけど（笑）。今





は父と兄、叔父がぼくの仕事を助けてくれています」

その木を加工する際、大工はノミを入れてみれば、その材の良し悪しがすぐにわかるのだそう。特に年輪の詰まったヒノキはノミやカンナがきれいに入る。手加工だからこそ、四万十ヒノキの良さも手応えでわかる。

「四万十の気候風土に建つ家は、同じ土地で育った木のほうが長持ちすると思うし、流通コストもかからないので経済的でもあります。どこの山に立っていた木かわかるのも安心だと思うし、建てるなら地元の材を使うほうがいいと思う」

木を知り、適材適所で材を使い分ける若き棟梁が、四万十ヒノキのよさを伝えていく。



四万十ヒノキで
いつまでも大切に使える家具をつくりたい。

廣田 和也さん（ヒノキカグ大正集成工場長）四万十町大正

木肌の美しさが映えるシンプルなデザインのヒノキカグ大正集成。50年生の四万十ヒノキの集成材を使って作るオリジナル家具ブランドだ。長く、気持ちよく使って貰えるよう



に修理にも対応。使わなくなった場合、ここに送り返せば、バイオマス燃料として最後まで大事に扱ってくれる。これが木と生きる四万十町森林組合の生き方でもある。

四万十町森林組合は昭和27年設立。山で捨てられている端材や、価格の安い曲がり材などの間伐材も有効に活用していこうと平成元年、四国でもいち早く集成材工場の操業を開始。平成11年、コクヨグループと間伐材を利用した商品の事業提携が始まった。



「それまでは単に原材を供給するだけでしたが、コクヨさんとの出会いによって商品の加工技術も磨かれるとともに、外に目を向けた生き方ができるようになった」と、同森林組合の廣田和也さん。ヒノキカゲ大正集成の工場長でもある。

集成材とは、山から間伐してきた木材を製材しバイオマスボイラーで

低温乾燥にかけて、用途や目的に応じた長さや幅に材を貼り合わせて使う材のこと。ここでは最大で長さ7メートル、厚み12センチ、幅1メートルの板まで作れる。

「山の斜面に生える木は、元のところに曲がりが出ます。でも、その元玉には節が無く、集成加工する事で無節のきれいな材がとれる。これが集

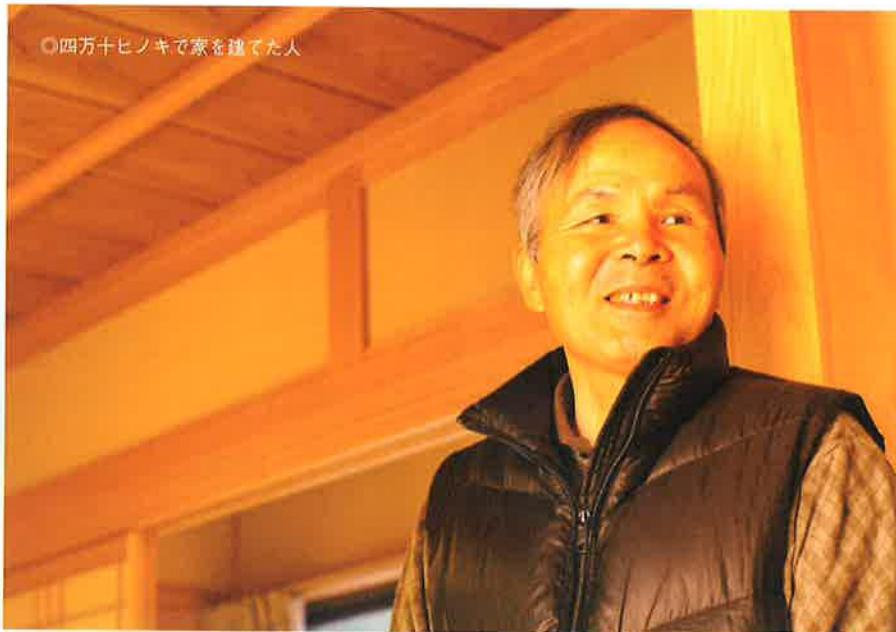


成材の一番の特徴です。厚みも長さも自由にできるので、いろんな家具の要望にこたえることができる」と、廣田さん。

間伐材というと、細い木というふうに誤解されている節もあるが、そうではない。成長する木と木の間を保つために伐採されたもので、四万十町森林組合では植えてから50年近く経ったヒノキを使う。

「地域をもう一度、元気にしていくためには四万十ヒノキが認知されていくのが一番いい。山のためには間伐を進めなければいけないし、工場としては加工技術をもっと磨いて四万十ヒノキをブランドに育てたい。そうすることで





自分の山の木、自分が伐った材で 家を建てました。

青木 孝夫さん 中土佐町大野見

4年前、家を建てようかと思い始めた時に、退職してから父の山を引き継ぎ、手入れをして林業をやりよる者が、まさかプレハブの家を建てては話にならんだろうと思ったのがきっかけです。

木の価格はだんだん下がり、お金にもならん。山をやるものしんどい状況の中で、これは山をやりよる者の意地みたいなもんよ。錢にはならんけど、自分の山の木で自分の家を建てられるという山の良さを見せ

たいという思いが一番です。柱も天井板も床柱もすべて、自分で伐って家の材料を揃えました。

間伐を兼ねて伐ったのは、父が戦後に植えた50～60年生のヒノキです。虫が入る「つちの日」を避け、よい時期に元伐りをし、枝を付けたまま山でそのまま半年ぐらい乾燥させました。柱が70本必要ならば70本、元切りにするという感じです。但し、1本の木が20数メートルありますので、最初に柱をとった後の2番玉の



木でもまだ充分に柱がとれるほどの長さです。製材した時に実際の本数で言えば、その倍以上になっていました。

構造材として一番大事な柱には元玉を使い、二番玉も柱にして、三番玉、四番玉は根太、垂木に使っています。天井板はスギ。床柱にはヒノキの天然しづり。どこにも合板は使っていません。材料代はタダじゃけねえ。

大野見は県内でも雨の多い土地柄ですが、梅雨時でも全然カビがつたりはしません。木そのものが呼吸するせいが快適ですし、夏は涼しく冬も温かいです。

自分で伐ってきた木ですので、こ

うやって柱になっても、この木が山のどこのあたりに立っていたかは、だいたい覚えてています。昔、父と一緒に山の高いところに行った時に「ここから見てみよ。山ばっかりしかない。ほんで山を大事にせにゃどうしようもない」と、よう言いました。そういう父との思い出も一緒に建つちります。





山のわかいし対談

これからの山と 四十万ヒノキが見る夢

- ◎三原村森林組合 [労務班] 伊藤 恒さん
- ◎西土佐村森林組合 [林産担当] 谷平 貴宏さん
- ◎中村市森林組合 [林産担当] 立石 憲生さん
- ◎四十町森林組合 [林産担当] 井上 澄男さん
- ◎須崎地区森林組合 [森林整備担当] 竹村 洋宣さん

ゲスト

- ◎高知県幡多林業事務所
[森林組合対策・森林計画等担当] 大石 尚さん

司会：四十万ヒノキの現場、山の現状をよく知る森林組合の皆さんです。県の幡多林業事務所の大石さんと一緒に、四十万ヒノキのブランド化を進めていくにあたって今、山が抱えている問題、これからの山の夢や課題などを話していきたいと思います。

大石：四十万の山には伐採期を迎えていた木とともに、まだまだ育てていかなければならぬ木も多い。間伐や搬出の作業を進めていく上の課題や足りないと感じているものがありますか。

立石：高知の地形からいうと、急峻な山が多い。昔は架線を張って木を搬出していましたが、今は架線技術を持った人も少なくなり、作業道を作つて間伐材を出すという方法が主流です。でも、それではどうしても木を出せない場所が出て来ているのが実態です。高性能林業機械の導入は進んできたと思うが、これからは架線と作業道とを併用したかた

ちで収入間伐をする必要が出て來た。そのための技術、ノウハウが足りないと思います。

竹村：うちは架線集材を行っていますが、機械が全然足りません。だから、林産事業をやりたいができない状況です。人工林も多く、資源として使えるものが成熟しているはずですが、手入れが遅れているせいか、まだ材として使えないものも多い。

井上：窪川地区では民間レベルで経営計画を通じて山に入っていくわけですが、今まで四十町有林や国有林で培った技術をもつて民間の個人所有の人たちの山に入っていかないといけないと思いますね。

伊藤：ぼくは造林の作業でヒノキを植えています。この仕事をするようになって日が浅いので、いろんな疑問や気になるところが多くあります。木材の需要自体が落ちて来ているのに機械を入れて、生産性だけを上げ



大石さん



立石さん

て供給していくのはどうしてなのか。こんなにヒノキがたくさんあるのに、まだ植えるのかなとか。ヒノキも植えるけれど、ほかの木も植えていろんな多様性が保てる森をもう一度取り戻したほうがいいのではないか。

谷平：今、四万十市西土佐地域は7割がヒノキの植林で、森林組合の仕事は間伐がメインです。場所によつては手間もコストもかかるので皆伐にしている所もあります。皆伐した後は放ったらかしになった山も多く、うちではそういう山の手入れをするために国や県の補助を活用して植林をしています。ヒノキの山はもうすでにあるものだから、山を立て直していくために今、自分たちができる範囲でいえば、ヒノキ林の間伐を進めて行って、植林の中にできるだけシイやカシや広葉樹などの生える針広混交林施業へと変えていくのが、良質ヒノキの産地につながると思っています。



竹村さん

四万十ヒノキの背後にあるストーリーが大事になってくる

司会：お話を聞きながら、はつと思いついたんですけど「もう四万十ヒノキは植えません。その代わり、今残っているヒノキだけが四万十ヒノキです。その残っているモノに価値がある」みたいな考え方を持っていくと、もしかしたら、どこかで山のサイクルが戻って来て、またさらにヒノキが必要になって来る。長い目で見ると、そういう方法もあるかもと思いました。

立石：四万十市では百年以上のヒノキを育てる長伐期施業です。幡多の四万十ヒノキは香りがよくて、色ツヤもいい、皮目もすべすべとしている。日本でも優良な品質として評価されています。利益を得るために大量生産のようなかたちで伐採するやり方も必要かもしれないとも思いますが、私は四万十市の長伐期施業というやり方が一番よいと思っています。



井上さん

す。本当に品質の高い、しかも全国的にも量があまりないような良質のヒノキの産地を作っていくたい。一気に皆伐をするのではなく、道を抜いて適度な間引きをして下草を生やす。木も育てて自然環境も守っていくという生き方がよいのではないかと思っています。

伊藤：四万十ヒノキのクオリティーが高いというお話がありましたが、そこにストーリーが大切なと思います。これからは、どんな環境で育ったヒノキなのかとか、ヒノキの背後にあるストーリーが大切になってくると思います。

司会：おっしゃる通り、外から買う人は、なぜ四万十は百年のヒノキを育てようとしているのか、四万十地域はそういう暮らしをしているから実現できるんだというようなストーリーですよね。四万十ヒノキのブランドを作るということが、地域全体のブランドになると思うんです



伊藤さん

ね。もともと扱っているものが百年ぐらいかかるものなので、そういう考え方みたいなのを四万十ヒノキを扱っているエリアから発信する事が本当のビジョンかもしれない。

大石：木を売っていくにも、やっぱり一番、山にしづ寄せが来るんですよね。加工があって、大工さんがいて、いろんな消費者があって、外材の為替の問題もあるんでしょうけれど、価格は全部山にしづ寄せがきて、言いなりになっている。そのためにも、もっとこっちから「いやいや、四万十ヒノキはこうだ」という川下へ向いて積極的に発信していくことが大事になってくると思いますね。

竹村：長期的なビジョンを持って山づくりをしていくことだと思います。うちは民有林の扱いが多いのですが、森林所有者が山に関心がなく、境界も全くわからない山も多い。四万十ヒノキのブランド化をきっかけに山に関心を持ってくれたら、森林



谷平さん



整備もしやすくなると思います。戦後、木を植え、育てて来た先輩たちから、自分ら世代が引き継ぎ、次に手渡すために山を木をどう育てていくのか、百年後どんな木を残さなければいけないか。自分らはそういうことを育てているんだということを伝えて行きたい。

立石：個人の山主さんが山林に興味を持たないのは、経済的な材価の値下がりも関わっていると思います。でも全国でも稀な四万十ヒノキの産地で、物量的にも少ない良質のヒノ



キとなれば、1本あたりの売価も当然高くなる。山主さんも収入源、資産価値として山を見直すきっかけになると思います。それが作業道の整備や、若手の林業に携わる人と雇用を育てる事にも繋がると思いますし、林業というものの技術、考え方をずっと継承していくためには、戦後から植えた四万十ヒノキを大事にし、山主さんにも山の資産価値を理解して貰い、もう一度、山の存在を考えて貰いたい。

谷平：そのためにはストーリーも作

らんといかん、ぼくら森林組合が先頭で頑張りたい。地域の人たちが自分たちは山に四万十ヒノキを持っていることを誇りに思って貰いたいし、ヒノキを購入する人には、こういう人たちが住んでいるから良質な四万十ヒノキが育っているんだと思って貰えたらいい。

大石：四万十地域はヒノキの産地ですが、まだまだ木を育てていく段階でもあって、人間でいえば“若いし”なんです。でも、そうは言いながら、きれいごとではなく、どこかでお金にはしていかないといけない。今の時点で山のためにやれることをやりながら、百年先の四万十ヒノキの森を育てていくための理想も持っていないければいけない。これからは顔の見えるような山づくりが必要だと思いますね。

司会：そこには人が生きている、そこで人々がどういう生き方をしているかということがブランドだと思いますし、林業という職業の価値、四万十ヒノキのブランド力を上げてもらうためにも、皆さんには頑張ってもらいたいと思います。ありがとうございました。





SHIMANTO HINOKI DATA

【資料編】



◎四万十ヒノキ

四万十川流域を含む高知県西部地域に豊富に存在するヒノキです。四万十市・四万十町・中土佐町・三原村の4市町村では、このヒノキを「四万十ヒノキ」と呼んでいます。

◎豊富な森林資源を有する高知県

高知県は、県土の84%を林野が占める全国屈指の森林県です。森林面積のうちヒノキ林は面積が166,121ha、蓄積量が59,524千m³です。

◎将来屈指のヒノキ一大産地

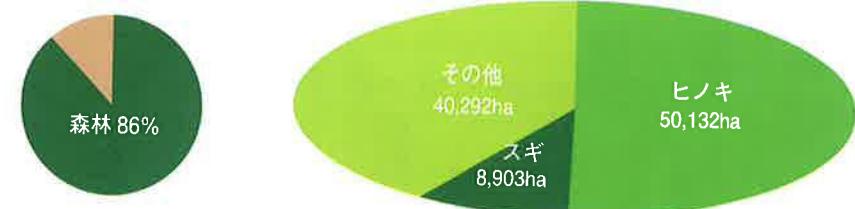
四万十市・四万十町・中土佐町・三原村は、高知県西部の四万十川流域に位置し、4市町村の総面積は155,316haです。そのうち、森林面積は134,268ha(民有林、国有林)で、総面積の86%を占めています。森林面積のうちヒノキ林は、50,132haです。これは、高知県内のヒノキ林面積の約30%にあたります。将来は全国でも「屈指のヒノキ一大産地」となる時代がそこまで来ています。

★市町村別森林面積

	総面積 (ha)	森林面積 (ha)	民有林面積 (ha)			
			ヒノキ	スギ	その他	計
四万十市	63,229	53,421	19,802	4,382	17,649	41,833
四万十町	64,230	56,086	19,997	3,271	16,359	39,627
中土佐町	19,320	17,292	7,805	904	4,817	13,526
三原村	8,537	7,469	2,528	346	1,467	4,341
合計	155,316	134,268	50,132	8,903	40,292	99,327

資料：高知県HP 統計データ「平成30年度 高知県の森林・林業・木材産業」

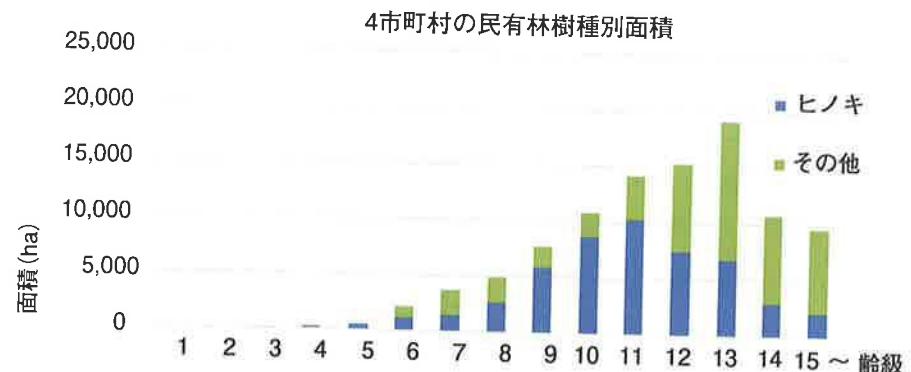
4市町村の総面積における森林の割合



4市町村の森林の内訳
その他はマツ、ナラ、クヌギ、カシ、シイなど

◎成長するヒノキ林

4市町村の民有林ヒノキは、林齢でみると41年生から65年生までの割合が多く、面積では6割以上を占めています。



SHIMANTO HINOKI DATA

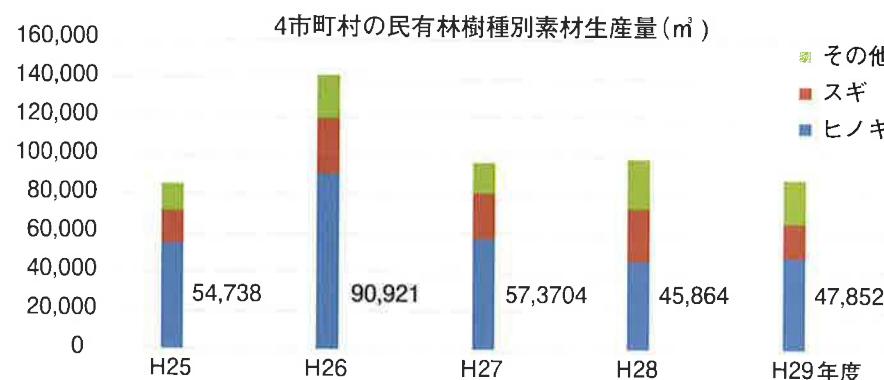
◎ヒノキを育てる

ヒノキの植栽は、1haあたり約3,000本です。その後、5~7年程度下草刈りを行い、つる切りや除伐を進めます。20年生くらいから10年程度の間隔で間伐作業を行い、形状の良い良質材を育てていきます。間伐は保育間伐(切捨間伐)と材を販売する収入間伐(搬出間伐)とに分かれます。現在では、主伐時期を80年生以降とする方法がとられています。



◎素材生産量の5割がヒノキ

4市町村の民有林の素材生産量は、平成29年度で88,019m³です。
そのうちヒノキの生産量は47,852m³となっています。



四万十ヒノキ柱の強度性能試験

【目的】四万十ヒノキによる柱の強度性能を把握するためにJAS規格に基づき強度試験を行いました。

【期間】平成29年～令和元年

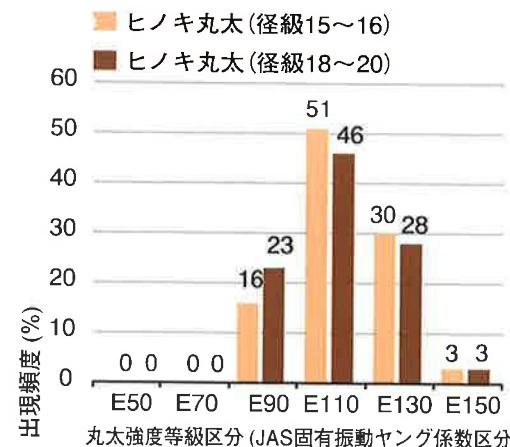
【場所】四万十町森林組合北ノ川山元薪木場、高知県立森林技術センター

【試験材(丸太)】◎四万十市有林材(板ノ川ひのき52年生)径級16(本50)径級20(50本)

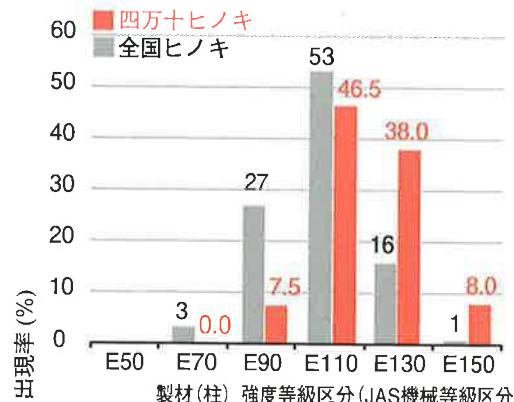
◎四万十町有林材(キビジリひのき40年生)径級16(50本)径級20(50本)

【試験材(製材)】105mm×105mm×3m(100本)/120mm×120mm×3m(100本)

四万十ヒノキ丸太の強度性能試験



四万十ヒノキ柱の強度性能試験



■ 基本統計量(四万十ヒノキ)

データ数 200本
平均値 11.7kN/mm²
変動係数 11.0%
5%下限値 9.5kN/mm²

資料: 高知県立森林技術センター(2019)

■ 基本統計量(全国ヒノキ)

データ数 899本
平均値 10.5kN/mm²
変動係数 13.3%
5%下限値 8.1kN/mm²

資料: 木構造振興株式会社(2011)

温故知新で四万十ヒノキを活かす

高知県知事 濱田 省司

古くから土佐材は、御用木として江戸城や二条城などに献上され、優良な木材として利用されてきました。四万十地域は全国有数のヒノキの産地です。今日まで、四万十ヒノキの良さや性質を熟知した職人の技術により、地域の住宅が建てられ、県外にも優良な木材として供給がなされてきました。近年は、企業を中心にSDGs（持続可能な開発目標）の観点から、木材が持続可能な材料として再評価され、木材を積極的に活用しようとする社会的な機運が高まってきています。このため、都市部の店舗やオフィス空間など住宅以外の分野でも木材を利用したいというニーズが高まり、少しずつ事例も増えつつあります。四万十ヒノキブランド化推進協議会は、地域の関係者の皆様が一丸となって、四万十ヒノキの家づくりや新しい木質空間の創造に取り組んでいます。



組んでいます。四万十ヒノキは、こうした新しいニーズにも、伝統的な技術と新たな技術を融合して、ユーザーの皆様のご期待に応えられるブランドです。四万十ヒノキが県内外の多くの皆様にご利用いただき、末永く親しまれることを心から期待しております。





四万十ヒノキのロゴマーク

半世紀を優に越える
安定感のある大木のイメージと
次の100年を見据えるように
堂々と山で働く男達の
信念あるイメージを重ねたシンボルマーク。
山とヒノキで生きてきた人々のプライドを
示すメッセージ性を持たせています。

SHIMANTO HINOKI BOOK



四万十ヒノキブランド化推進協議会

【構成】

四万十市・四万十町・中土佐町・三原村・中村市森林組合・西土佐村森林組合
四万十町森林組合・須崎地区森林組合・三原村森林組合・高知県森林組合連合会

【事務局】

四万十市 農林水産課 高知県四万十市中村大橋通4-10

TEL: 0880-34-1118 FAX: 0880-34-0478